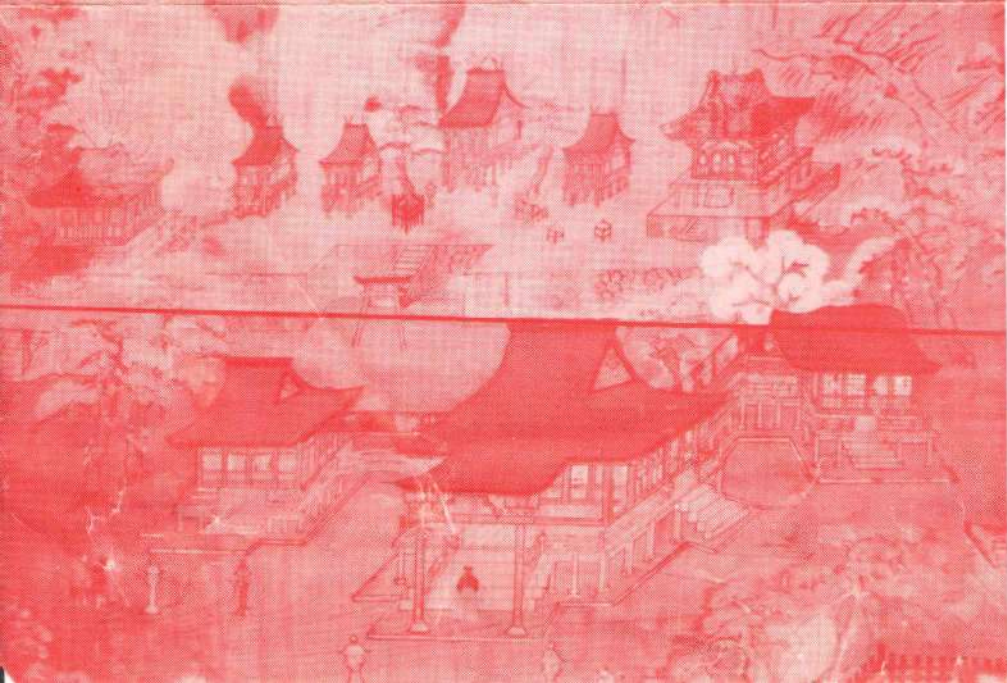


若狹神宮寺

奈良二月堂へ

お水送りの寺

福井県小浜市神宮寺町
電話小浜(56)一九一一番



若狹神宮寺の文化財

一、建物

○神宮寺本堂 室町時代末天文二十二年再建 重文

屋根入母屋造桧皮葺、間口八間、奥行九間余 廻

椽向拝一間（十二尺）付 建坪一一〇坪

和様唐様天竺様折衷

○神宮寺仁王門（北門）鎌倉時代末 重文

単層屋根 切妻造 柿葺二軒和様式八脚門

○大膳院（桜本坊）書院庭園 江戸初期

表門 桃山時代



若狹神宮寺本堂



若狹神宮寺仁王門

一、彫刻（全て桧木造漆塗箔押又は彩式）

○男神（若狹彦）女神（若狹姫）鎌倉初期 重文

○本尊薬師如来 藤原末期 寺宝 座像 二軀

○脇侍日光月光菩薩 藤原末期 同 立像 二軀

○十二神将 鎌倉初期 同 立像 十二軀

○千手観世音菩薩 伝奈良期 同 座像 一軀

○不動明王 平安末期 同 立像 一軀

○多聞天王 平安末期 同 立像 一軀

○北門仁王像 鎌倉末期 同 立像 二軀

○開山法休像 伝奈良期 寺宝 一木座像 一軀

一、天然記念物 椎（スタジイ）の木 市指定 一本

一、古文書 奉書折帛八〇点 日記類二〇点

一、その他 鈴、紫石硯、仏画像、等あり。

若狹神宮寺の由来

若狹は朝鮮語ワカソ（往き来）が訛って宛字した地名で、奈良も朝鮮語ナラ（都）が訛って宛字されている。この地方は若狹の中心で白鳳以前からひらけ、この谷は上陸した半島大陸の文化が大和（朝鮮語でナラともいう）へはこばれた最も近い道であった。それは対島海流にのってきて着岸した若狹浦の古津から国府のある遠敷（おにふ）朝鮮語ウォンフー「遠くにやる」が訛った）や根来（ねごり）朝鮮語ネ、コーリ「汝の古里」が訛った）と京都や奈良が百キロほどの直線上にあることである。

この地方を拓き国造りした祖先が、遠敷明神（若狹彦命）で、その発祥地が根来の白石で、都へ近道の起点に良地をえらび、遠敷明神の直孫和朝臣赤磨公が八世紀初め山岳信仰で、紀元前銅鐸をもった先住のナガ族の王を金鈴に表わし地主の長尾明神として山上に祀り、その下に神願寺を創建され、翌年勅願寺となったその秋には、紀元一世紀頃唐服を着て白馬に乗り影向し、すでに根来白石に祀られていた遠敷明神を神願寺に迎え神仏両道の道場にされた。これが若狹神願寺の起源で鎌倉時代初め若狹彦神社の別当寺となつて神宮寺と改称したのである。

又、神願寺の開山赤磨（和氏）公は白石の長者の神童（幼児）を大和に伴い当寺の名僧、義淵僧正（大樹）に托され、後東大寺開山良弁僧正となられ、神願寺へ渡来した印度僧実忠和尚が良弁僧正を助けて東大寺を完成し、さらに二月堂を建て、お水取り行法を始められた。その若狹井の水源が白石の鶴之瀬であるから、白石神社で行ったのを伝え根来八幡宮では毎年三月二日、山八神事を行い同日夜、神宮寺から神人と寺僧で鶴之瀬へお水送り神事がある。

若狹神宮寺の略歴

西暦 七二四	四三代元明天皇和銅七年若狹彦神の直孫和朝臣赤磨公が金鈴を地主長尾明神と祀り鈴応山神願寺を創建する。
西暦 七一五	四四代元正天皇霊龜元年勅願寺となり同年秋九月に若狹彦姫神を根来白石より迎え神仏両道の寺とする。
西暦 七九八	五〇代桓武天皇延暦十七年勅願で七堂伽藍廿五坊を再建本尊小像に付胎内に入れ大像を新造し安置する。
西暦 一〇八三	七三代白河天皇永保三年雷火で本堂焼失し本尊薬師如来も焼失、千手観音（現存）は難をさけられる。
西暦 一〇九一	七四代堀河天皇寛治五年勅願で本堂が再建され本尊日光、月光、不動多聞を新造し千手観音と安置する。
西暦 一二三九	延応元年將軍頼經公祈願寺となり莊園寄進され七堂伽藍廿五坊を再建十二神将（現存）を安置本堂五間四面となる。
西暦 一二四八	宝治二年当寺が若狹彦神社を造営し別当寺となり神宮寺と改称し、鎌倉幕府祈願寺社七大寺七大社の内に加えられる。
西暦 一五四五	天文十四年雷火で本堂焼失し諸仏像は全て難をさける。
西暦 一五五三	天文二十二年本堂再建（現存）入仏落慶供養あり。
西暦 一五七二	天正元年若狹守護職武田元明を山内桜本坊にかくまう。
西暦 一五八二	天正十年武田元明明智光秀に同盟の罪、切腹させられる。
西暦 一五八八	天正十六年当寺と若狹彦神社の莊園を秀吉が全部奪う。
西暦 一六六二	寛文二年若狹大地震本堂仏像破損する。
西暦 一六七五	延宝三年本堂修理、仏像も修繕全て塗りなおす。
西暦 一八七一	明治四年国家神道により若狹彦神社を国幣社とされ当寺境内遠敷明神社も神仏分離令により、社殿を毀し神体を差出させられる。身代りを出し神体（現存）は本堂に秘藏する。